



海原を天草刈りの独り行く
 夏立つやぶつかりさうな多島海
 約束の場所に一人や夏椿
 一つ落ち水輪一つや夏椿
 金魚玉怒り六秒こらへよと
 喉もとに來る空蟬のくるしみは
 空蟬の背中は登る意志を秘め
 青霧に巻かれてよりの人生ぞ

泉に背向ければ恋の消えてをり
 こどもの日過ぎたり象のはな子の死

横須賀海軍カレーパン食ひ炎天へ（川名大氏）
 りゆうぐうのつかひに乗らむ夏休み（大澤岳君）

俳句亭々

小林貴子

「岳」俳句会では「浅間山」と書いて「あさま」、「常念岳」と書いて「じょうねん」という読み方を許容しているが、「川」や「峠」についても同様に考えてよいかという質問を、以前から、複数の方から頂いている。

私がかつて「蓼科の雲稚かり源五郎」を作った時は「蓼科には蓼科山も蓼科高原もあるので、はっきり蓼科山と言った方が良い」と指導された。松本市から安曇野にかけての住人の魂の山、常念岳は俳句に詠みたいものだが、浅間山ほど全国に知られた山ではなく、「常念」だけだと「常に念じていることがら」のような意味と受け取られかねない。そこで

「常念岳」と「岳」をつけ、「じょうねん」の読みが行われている。ただし、季語「初浅間」には「山」はつけない。

過日、本井英さんにより小諸で行われた「日盛会」のシンポジウム「俳句と地名」（窪田英治さん他がパネラー）においてもこの点が問題になった。討議の中で、「千曲川」と書いて「ちくま」と読ませて良いかどうか、一つには地元の人が日ごろ「ちくま」と呼んでいるかどうかも考えたいという意見が出て、なるほどと思った。経験的に「天竜川」と書いて「てんりゅう」と読ませるのは違和感ないが、「碓氷峠」と書いて「うすい」と読ませるのはちょっと怯む。明確な規定はないが、無理のない表現で地名を大切にしたい。